

2025年4月8日

アジア研究図書館

アジア研究図書館での勤務を終えて(水上 香織)	1
江上波夫氏旧蔵資料について(鈴木 朝香)	3
キリル文字モンゴル語の蔵書整理に携わって(菅原 一花)	6
令和6年度東京大学アジア研究図書館展示	9
文化も薫る聖なる敷居 レザー廟図書館協力覚書調印記念展示・セミナー報告 (河原 弥生)	
ラオスにおける生業変容と住民の栄養・健康：人類生態学的視点からの考察 (木部 未帆子)	15
アジア研究図書館利用案内	
次号の予定	
編集後記	

編集・発行：東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門
(RASARL)

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

アジア研究図書館での勤務を終えて

水上 香織

(日本学術振興会特別研究員 PD、神戸市外国語大学)

筆者は、2019 年 6 月から 2020 年 3 月までアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) で学術支援職員として勤務し、2020 年 10 月から 2025 年 3 月までアジア研究図書館研究開発部門 (RASARL) で特任専門職員として勤務した。筆者は U-PARL 在職時には東京大学人文社会系研究科の博士課程の学生であったが、満期退学したのちに RASARL で雇用され、2024 年に博士の学位を取得した。研究と論文執筆に専念する日々のなかで、アジア研究図書館での勤務は、自身の研究領域を超えて多様な学問的視野に触れる貴重な機会となっていた。以下では、筆者にとって特に印象に残った業務内容について振り返ることにしたい。

(1) 水島司先生・柳澤悠先生の旧蔵資料整理

筆者は南アジア近現代史を専門としているため、アジア研究図書館では主に南アジア関連の資料整理に携わった。とりわけ最も長期間にわたって従事したのは、水島司先生と柳澤悠先生の旧蔵資料の整理である。筆者は、水島先生が 2018 年に東京大学を退職されるまで、水島先生の指導学生であった。また、柳澤先生にも、研究会などの場でしばしばお目にかかる機会があった。個人的にお世話になってきた先生方の資料を整理することは、非常に学びが多く、嬉しい経験であった。

水島先生と柳澤先生の旧蔵資料には、一般的な出版書籍とは異なる様々な特殊資料が含まれており、それらの来歴を調べる作業では特に知的好奇心を刺激された。なかでも、村落地税台帳 (Settlement Register) の史料は、知れば知るほど興味深かった。この史料は、イギリス植民地支配者が、南インドの一部の地域で納税責任者と納税額を明確にするために定期的に作成したものであった。そのため、史料を一見しただけでは土地の面積や所有者が羅列されているだけのように見えるし、そこから社会の変化を読み取ることなど可能なのだろうかと感じられる。しかしながら、水島先生と柳澤先生は、この史料に現れる情報を電算機で処理し、長期的な視野で見た際に被抑圧カーストの人々が徐々に土地を保有するようになるというダイナミックな社会的な変化が起こっていたことを明らかにしたのであった。筆者は、史料自体の特殊性に加えて、そうした史料の読み解き方にも強く興味をひかれた。

水島先生と柳澤先生の旧蔵資料について調べる作業は、先生方の研究の軌跡をたどる作業でもあった。筆者は、先生方と対話しているような感覚を抱きながら、その作業を大いに楽しんだ。

(2) ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) 寄贈識字教育資料の整理

水島先生と柳澤先生の旧蔵資料整理に次

いで長きにわたって取り組んだのが、ユネスコ・アジア文化センターから寄贈された識字教育資料の整理であった。この資料はアジアの様々な言語で書かれている点特徴的であり、筆者は主に、自身が学んできたウルドゥー語とヒンディー語の資料の整理を担当した。自身の研究以外でこれらの言語を使う機会はほとんどなかったため、アジア研究図書館での業務を通じて思いがけず活用できたことはとても嬉しかった。

識字教育資料に関する企画展示を準備した際には、自身が学んでいない言語で書かれた資料についても目にすることになり、様々な発見があった。中国やベトナム、ラオスで使用する彝語や、モルディヴで使用するディヴェヒ語については、その存在を初めて知り、それぞれの文字体系に興味を持った。また、東南アジアで 1990 年代から 2000 年代にかけて作成された識字教育資料には、女性の人権について啓蒙するための内容が含まれており、日本語に翻訳して現在の日本でも活用できるのではないかと感じた。特に、インドネシアで 2000 年に作成されたボードゲームは、ゲームを通じて自然に女性の政治やビジネスへの参加について議論が生まれる仕組みになっており、興味深かった。

以上のように、アジア研究図書館での勤務を通じて多様な学びを得ることができ、深く感謝している。ここで得た知識と経験を、今後の研究および教育活動に活かしていきたい。

江上波夫氏旧蔵資料について

鈴木 朝香

(東京大学大学院学際情報学府・博士課程)

1. 江上波夫氏旧蔵資料について

今回、アジア研究図書館でのオンキャンパスジョブ（以下、OCJ）で、本学名誉教授である故江上波夫氏の寄贈文献の整理に携わった。

江上波夫氏は、1948 年以降、東洋文化研究所に教授として勤め、騎馬民族征服王朝説（正確には「東北アジア騎馬民族系王朝の日本征服・統一国家樹立説」）を提唱したことで知られる考古学・歴史学者である。東アジアから中東まで、広くユーラシア大陸各地でフィールドワークを展開し、文書断片や土器片などの考古資料と、多くの文献を持ち帰った。その多くは横浜市に寄贈され、横浜ユーラシア文化館で管理・展示されている他、本学総合研究博物館にも所蔵されている¹。

アジア研究図書館では、2024 年度より整理を開始し、筆者は、その中でも、ソ連時代に各共和国の科学アカデミーから出版された雑誌や書籍など、ロシア語文献の整理を担当した。

2. 資料整理の楽しみ

OCJ 採用時は、とにかくロシア語を使った仕事ができることが喜びであったが、私

自身の研究が旧ソ連中央アジア地域を対象としていることもあり、ソ連時代にロシア語圏で出版された中央ユーラシアの考古学や歴史学に関する書籍を扱うことは、常に知的好奇心をくすぐられる仕事だった。

例えば、カザフ・ソビエト社会主義共和国の科学アカデミーに提出された学位論文に、日本語とテュルク語の音韻的・語彙的類似性を論じるものがあった。日本語系統論には、日本語を、テュルク諸語と同じ、アルタイ語族に結び付けて論じる学説があり、かつてこれが主流をなした時代があったと聞いたことがある²。今日、同学説は支持を失っているが、この学位論文は 1970 年代に提出されており、日本語がアルタイ語族の一つである可能性が、まだ生き生きと議論されていた頃の研究とみられた。

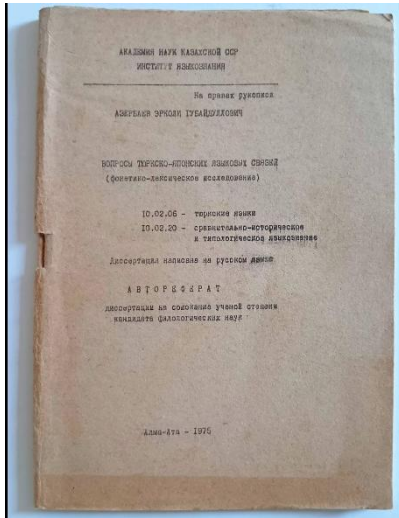
分野は異なれど、どんな時代に、どんな研究がソ連でなされていたかをみることは、同じく旧ソ連地域研究に取り組む私にとっては大変興味深く、また過去の出来事を想像する楽しみを与えてくれた。カザフの学位論文も、一人 1970 年代にタイムトリップしたような気分の高揚を与えてくれたし、他にも、特にソ連崩壊直前の混乱期に出版された文献などは、心揺さぶられる資料だ

¹ 「江上波夫教授旧蔵資料について」東京大学総合研究博物館 (https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKoukoga/Inner_Mongolia/exp.php)、2025 年 3 月 4 日最終閲覧；

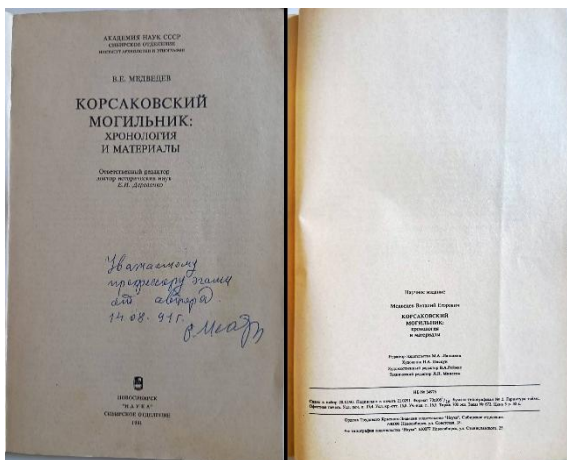
中見立夫「江上波夫と内モンゴルのオロン・スム遺跡調査」横浜ユーラシア文化館 (<http://www.eurasia.city.yokohama.jp/olonsume/excavation.html>)、2025 年 03 月 04 日最終閲覧。

² 松本克己 2001 「日本語の系統：回顧と展望」『言語研究』120、89-96 頁。

った。



(写真 1 : 1975 年にカザフ・ソビエト社会主義共和国科学アカデミーから出版された学位論文『テュルク語と日本語の言語的つながりに関する問題 (音韻・語彙の研究)』の要旨。)



(写真 2 : 1991 年 2 月にノボシビルスクで出版された学術書。左の標題紙にある手書きのメモには「尊敬する江上教授へ 著者から 91 年 8 月 14 日」とあり、ソ連崩壊に直接的な影響を与えた、8 月クーデター直前に江上氏に渡った文献だと推測される。)

3. 偉大なる先人たちの交流

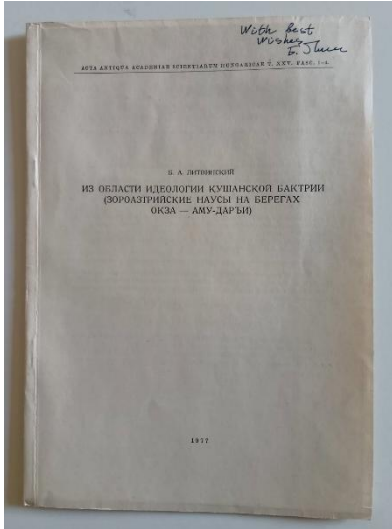
もう一つ、過去へと思いを馳せる遊びを刺激してくれた材料は、論文の抜き刷りの

余白や書籍に挟まれたメモにある、江上氏と交流があったソ連研究者の肉筆だ。特にタジク・ソヴィエト社会主義共和国科学アカデミーの В. А. Литвинский 氏 (B. A. Litvinovskiy) から多くの文献を受け取っていた様子で、ソ連人のキリル文字やラテン文字を見る度に、思わず笑みがこぼれた。

ソ連は、98 年生れの筆者からすると歴史としてしか捉えられないが、幼少期に古い地球儀をみて父母か、学校の先生かが「昔、ソ連という怖い国があって」と話してくれたことはよく覚えている。そのため時代を共有していない筆者にも、ソ連＝怖い国、自由のない国、悪い国という通俗的なイメージは、しっかりと植え付けられており、大学に入って旧ソ連地域の勉強を始めるまでは、ソ連を「暗黒の国」のように思っていた。

実際、日本とソ連地域の交流は、崩壊後の現在ほど自由ではなく、簡単でもなかったはずだ。そのような中で、同じ学問的関心をもった研究者らが、国境も言語も超えて交流した形跡をみると、勝手に心温まる想像が発展していった。同時に、子ども時代に強くもった、ソ連に対する固定的なイメージが、穏やかに否定され、それとは異なるソ連の側面が、リアリティをもって感じられた。

加えて、それらの薄い抜き刷りや小さなメモ書きのすべてが、アジア研究図書館に届くまで、長く丁寧に保管されてきたことを思うと、江上氏がソ連の考古学・民族学研究などを高く評価し、政治的な諍いに関係なく、敬意をもって学術的交流を行っていたように感じられ、深い感銘を受けた。



(写真 3 : 抜き刷りの余白に残された、B. A. リトヴィンスキー氏の肉筆 (標題紙右上)。“With Best Wishes, Б. Лит.”と書かれている。)

4. 最後に

江上波夫氏旧蔵資料の整理は、とても心躍る作業であったが、今回の OCJ から「何を学んだか」を具体的に言語化することは難しい。確かに何かを学んだ気がするのだが、それが自分の研究にどう生きてくるのか、どのように自分のスキルアップに繋がったかは、これから徐々に明らかになっていくのだと思う。

しかし、現時点でも、約半年間の資料整理の作業は、自分の院生生活に多くの豊かさをもたらしたと確信している。この機会に恵まれた自分は、極めて幸運だったと思う。

キリル文字モンゴル語の蔵書整理に携わって

菅原 一花

(東京大学大学院人文社会系研究科 博士前期課程)

1. はじめに

筆者は 2024 年 10 月から 2025 年 3 月にかけて、江上波夫氏の旧蔵書であった書籍群の中のキリル文字モンゴル語書籍について、オンキャンパスジョブという形で整理する機会を得た。現在の筆者の専門は近代ベトナムの仏教であるが、学部生時代にモンゴル語の勉強もしていたため、その知識をもって蔵書整理に携わった。

本稿では、整理するにあたり印象的であった書籍や、モンゴル語書籍の書誌情報の登録に関する混乱した状況について紹介する。

江上波夫氏の専門がアジアの考古学であったために、書籍の内容も歴史学や考古学研究に偏っている傾向がある。各部族についての文化・考古学的研究や、叙事詩・口承文芸についての研究などはモンゴルの特徴を如実に反映しているといえよう。またほとんどの書籍は 1960 年代から 1990 年代、モンゴル人民共和国体制下で出版されたものであるため、マルクス主義に基づいた歴史研究や社会主義リアリズム文学研究などの政治体制を反映したものも見られる。

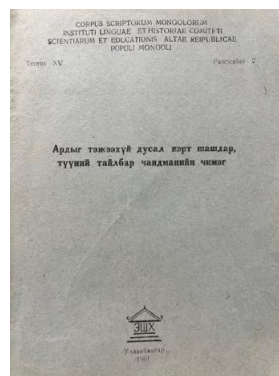
そしてさらに、仏教に関する書籍も散見された。江上氏旧蔵書籍群には仏教をテーマにした文学やチベット語との対訳を載せた経典、またモンゴル語に翻訳された仏典

などが含まれている。

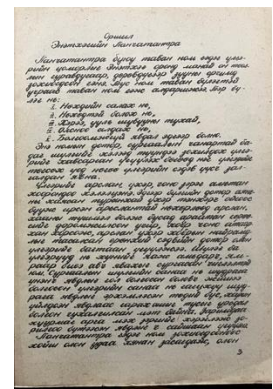
2. 印象的な書籍

それでは、印象的な書籍を紹介しよう。まず一つ目は、仏教書とその注釈書から構成される *Ардыг тэжээхүй дусал нэрт шашдар, түүний тайлбар чандманийн чимэг* (人々を養う豊かな雫とその注釈たる如意宝珠の莊嚴) (筆者訳)¹ (画像①) である。表紙と標題紙はおそらく活版で印刷されているのだが、本文は全てキリル文字の筆記体で書かれている (画像②)。1961 年に出版されたとあるため、当時のモンゴルの出版事情について考えさせられる一冊であった。

左：写真①



右：写真②

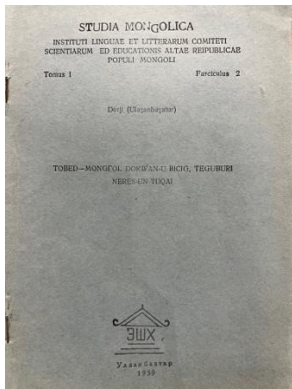


そして二つ目は、*Töbed-mongyol dokiyan-*

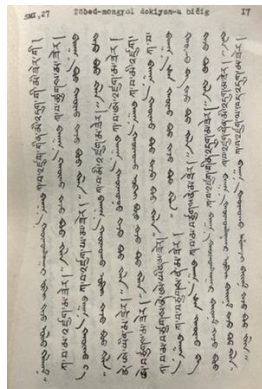
¹ Ts. Damdinsuren, *Ардыг тэжээхүй дусал нэрт шашдар, түүний тайлбар чандманийн чимэг*. Ulanbator: Шинжлэх Ухаан, Дээд Боловсролын Хүрээлэнгийн Эрдэм Шинжилгээний Хэвлэл, 1961.

u bičig, tegübüri neres-ün tuqai (チベット語とモンゴル語の辞典の名詞について)(筆者訳)²(写真③)である。表紙、標題紙にあるタイトルは、文語モンゴル語、あるいはモンゴル語モンゴル文字表記をラテン文字転写した表記法で書かれている。キリル文字で書かれたモンゴル語のみを習っていた筆者にとってはタイトルすら内容を理解するのが難しく、『現代モンゴル語辞典³』の表記対応表を逐一参照する必要があった。さらに、本文はモンゴル文字モンゴル語とチベット語が手書きで混在しており(写真④)、内容についてはモンゴル文字モンゴル語を解するサラントヤ氏に尋ねざるを得なかった。江上氏旧蔵書籍群の中でも特に読解のハードルが高い 1 冊といえよう。

左：写真③



右：写真④

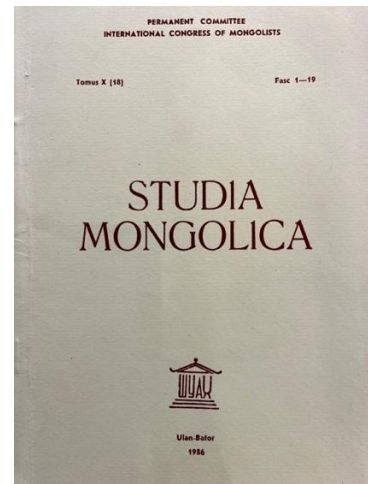


3. 学術雑誌の書誌情報に関する問題

前述の書籍は表記に問題を抱えたものであるが、他にもモンゴル語書籍の整理には問題が存在している。多くのモンゴル人民共和国内で出版された学術雑誌は、CiNii における書誌登録情報が混乱していたのだった。江上氏旧蔵書籍群の中には、*Studia Mongolica* (写真⑤)⁴や *Аман зохиол судлал*

(口承文学研究)(筆者訳)、*Түүхийн судлал* (歴史研究)(筆者訳)などの学術雑誌が多く含まれている。これらの学術雑誌は、CiNii では親書誌が形成され、関連書籍として各冊が登録されるという形で基本的に管理されている。しかし、親書誌として登録されている情報が雑誌名ではなく出版母体の名前(写真⑤)を例とすると、PERMANENT COMMITTEE INTERNATIONAL CONGRESS OF MONGOLISTS)になっているものがある。特に *Studia Mongolica* については CiNii 上の登録状況が混乱している。*Studia Mongolica* は途中で出版母体の名前が変わっているのだが、変更前の書誌情報で作られた親書誌があるにもかかわらず、変更後の情報で作られた親書誌が変更前の書籍の情報もカバーして紐づいている。また、定期刊行物としての書誌情報もあり、複数の書誌ツリーが重なり合って *Studia Mongolica* についての登録情報を形成している状態となっている。

写真⑤



筆者自身もモンゴルの出版事情や学術研究

² Dorji, *Töbed-mongγol dokiγan-u bičig, tegübüri neres-ün tuqai*. Ulanbator: ШУДБХ Эрдэм Шинжилгээний Хэвлэлийн Газар, 1959.

³ 小沢重男(編著)『現代モンゴル語辞典』、東京：大学書林、1994年。

⁴ Sh. Natsagdorj (Ed), *Studia Mongolica*. 10(18), 1986.

分野の歴史については詳しくないため、出版母体等の情報に関しては自分の整理が正確であるかどうか自信を持って言うことはできない。より専門知識を有した人間による登録情報の整理が必要であろうと思われる。

4. 終わりに

オンキャンパスジョブという制度によって、蔵書整理に携わることは大変学びの深いものであった。普段何気なく図書館を利用しているが、必要な書籍を見つけ出せる状態にしておくためには正確な書誌情報の登録と効果的な分類が必要不可欠であり、それを実現するための制度的な工夫が随所に散りばめられていることを身をもって経験することができた。特にモンゴル語は表記文字が複数存在するなど、情報登録や検索にハードルがあるため、その重要性を痛感させられた。

令和 6 年度東京大学アジア研究図書館展示
文化も薫る聖なる敷居
レザー廟図書館協力覚書調印記念展示・セミナー報告

河原 弥生 (RASARL 准教授)

はじめに

2024 年 12 月 20 日から 2025 年 1 月 31 日まで、令和 6 年度東京大学アジア研究図書館展示として、文化も薫る聖なる敷居ーレザー廟図書館協力覚書調印記念展示を、2025 年 1 月 10 日には記念セミナーを、RASARL の企画・運営により開催した。

両イベントは、2024 年 3 月に、十二イマーム派の第 8 代イマームであるアリー・レザー廟の附属機関であり、イスラーム圏最大級の図書館であるアースターネ・ゴドウス・ラザヴィー図書館・博物館・文書館機構（イラン・イスラーム共和国マシュハド市、以下レザー廟図書館）と研究交流のための協力覚書に調印した¹ことを記念しておこなわれた。同館から寄贈された全 12 点の資料²とともに、レザー廟および他のいくつかのイラン国外のイマーム廟と参詣行為、同派の代表的な宗教行事アーシューラー、信仰実践に関わるモノを紹介することにより、学内外の多くの方にアジアの文化の多様性に触れ、その研究意義について理解を深めていただくことを目的とした。

➡展示およびセミナーのポスター兼ちらし表・裏



1 協力覚書調印については、森本一夫「アースターネ・ゴドゥス・ラザヴィー図書館・博物館・文書館
機構との協力覚書調印について」『アジア研究図書館（東京大学アジア研究図書館ニューズレター）』
16号、東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門、2024年7月、1-5頁；「イラン・レザー廟
図書館との協力覚書に署名」アジア研究図書館ウェブサイト（<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/news/20240319>）を参照されたい。

² 寄贈資料の内容については、河原弥生「蔵書紹介：アースターネ・ゴドゥス・ラザヴィー図書館・博物館・文書館機構からの寄贈資料について」『アジア研究図書館（東京大学アジア研究図書館ニューズレター）』18号、東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門、2025年1月、7-10頁を参照されたい。

展示

展示は、総合図書館 1 階の展示室およびオープンエリアの 2 つのスペースを使っておこなった。

展示室では、まず展示ケース 3 台に受贈資料を配置した。資料は、レザー廟図書館に所蔵される 15 世紀のムスハフ(クルアーンの写し) のレプリカをはじめとして、シーア派信仰やレザー廟、レザー廟が位置するホラーサーン地方の歴史に関するものから成る。縦型展示ケース 1 台には、資料のほか、シーア派の信仰実践に関わるモノ(礼拝用モフル、アーシューラー行事で用いられる刃と鎖、聖廟のレプリカ、置物) を展示した。

また、展示室の両側の壁とオープンエリアを通じて、「1.レザー廟」、「2.シーア派のイマーム廟」、「3.シーア派の行事」の 3 つのテーマのもとに、イラン内外で撮影された写真を大型パネルに加工して吊るして展示した。

このうち展示室では、「1.レザー廟」のテーマのもと、長い歴史のなかで拡大し、現在ではイラン国内有数のコングロマリットに発展したレザー廟の壮麗な歴史的建築物、老若男女の参拝者、図書館の写本収蔵室内部、廟コンプレックス内で執り行われた調印式の様子を紹介する写真を配置した。



展示ケースでの資料展示 1



展示ケースでの資料展示 2



展示室全景



展示室でのモノの展示



展示室での写真パネル 3



展示室での写真パネル 1



展示室での写真パネル 2

オープンエリアでは、「2.シーア派のイマーム廟」として、ナジャフ（イラク）にある初代イマームのアリー廟、カルバラー（イラク）にある第3代イマームのフサイン廟、フサインの異母弟アッバース廟の写真を、「3.シーア派の行事」として、北インドのラクナウ周辺とイラン中部コムのアーシュラー（フサインの殉教を悼んで命日であるヒジュラ暦ムハッラム月 10 日におこなわれる宗教儀礼）の写真をそれぞれ展示した。

これらの展示内容紹介のため、A4 版三つ折りのパンフレットを印刷して配布した（本稿末尾に掲載）。



オープンエリア

また、本展示に合わせて、附属図書館事務部情報サービス課の協力により、総合図

書館 3 階においてミニ展示が企画された。総合図書館に所蔵される、イスラーム、イラン、イスラーム圏の書物文化、西アジア美術に関する 96 点の和書・洋書が展示された。



総合図書館 3 階ミニ展示 1



総合図書館 3 階ミニ展示 2

セミナー

会期中の 2025 年 1 月 10 日に、今後の様々な研究協力のあり方を探るとともに、寄贈資料の利用促進のために、レザー廟図書館について学ぶセミナーをアジア研究図書館レクチャールームにおいて対面開催した。学内外からレクチャールームが満席となる 15 名（学内者 9 名、学外者 6 名）の申し込みがあった。

セミナーは、佐川英治アジア研究図書館長（RASARL／人文社会系研究科）による

開会の挨拶と調印の報告で始まり、河原弥生（RASARL）の司会のもと、2 名の報告者による講演がおこなわれた。

まず、森本一夫氏（RASARL／東洋文化研究所）が、「アジア研究図書館とレザー廟図書館機構：いかなるマッチングか」と題して、覚書の概要のほか、長年のイラン研究者によるレザー廟図書館の利用を背景に、レザー廟図書館からの提案を受け、アジア研究図書館の開館を待って協力覚書調印が実現した経緯が説明された。

続いて、レザー廟の歴史研究を専門とする杉山隆一氏（京都橘大学文学部）に、「イマーム・レザー廟の発展と文化活動」と題して、レザー廟の興り、ティムール朝・サファヴィー朝期から現代までの廟の歴史的発展、莫大なワクフ財を利用した社会・経済・文化活動の展開、現代のイラン国内での位置付け、所蔵文化財の管理や図書館・博物館・文書館機構の運営にいたるまで、研究成果の一端を紹介していただいた。

質疑応答では、参加者から、レザー廟のイラン内外における活動について、ワクフの具体的な指定事項や現在のワクフの状況についてなど、レザー廟の歴史や現状に関する質問だけでなく、所蔵資料の内訳、蔵書目録の有無、利用方法、オンライン検索の可否、廟における出版史についてなど、今後の研究利用を念頭においた大変具体的な質問が多数寄せられ、覚書への関心の高さが窺えた。



セミナー：佐川英治館長（正面左）挨拶



セミナー：森本一夫氏（正面右）報告



セミナー：杉山隆一氏（正面左）報告

来場者・参加者アンケートより

諸般の事情により、年末年始を挟む冬季の日程となったため、展示期間を通じての来場者数は 104 名とあまり多くなかったのは残念であった。

セミナー参加者へのアンケート調査では、以下のような意見が寄せられた（回答者 5 名、一部抜粋、文言の修正あり）。

- ・ 廟を中心として展開するイラン社会について初めて知ることができた。
- ・ レザー廟が歴史的であり現代的であることに驚いた。
- ・ 宗教だけではなく文化的活動・学術的活動が盛んに展開されている点が特に印象的だった。
- ・ アジア研究図書館の意義についても知ることができた。
- ・ レザー廟図書館との協力覚書の意味についての話は、研究を支える大学図書館員として貴重だった。

・ レザー廟図書館については、イラン、シーア派研究の専門家のみならず、アラビストやイスラーム学の研究者からも所蔵史料への関心を聞くことがあり、より広い分野の研究の拠点としての重要性を持っていると思う。大学院生やイラン以外の研究者のための具体的な利用案内を含む講演を期待する。

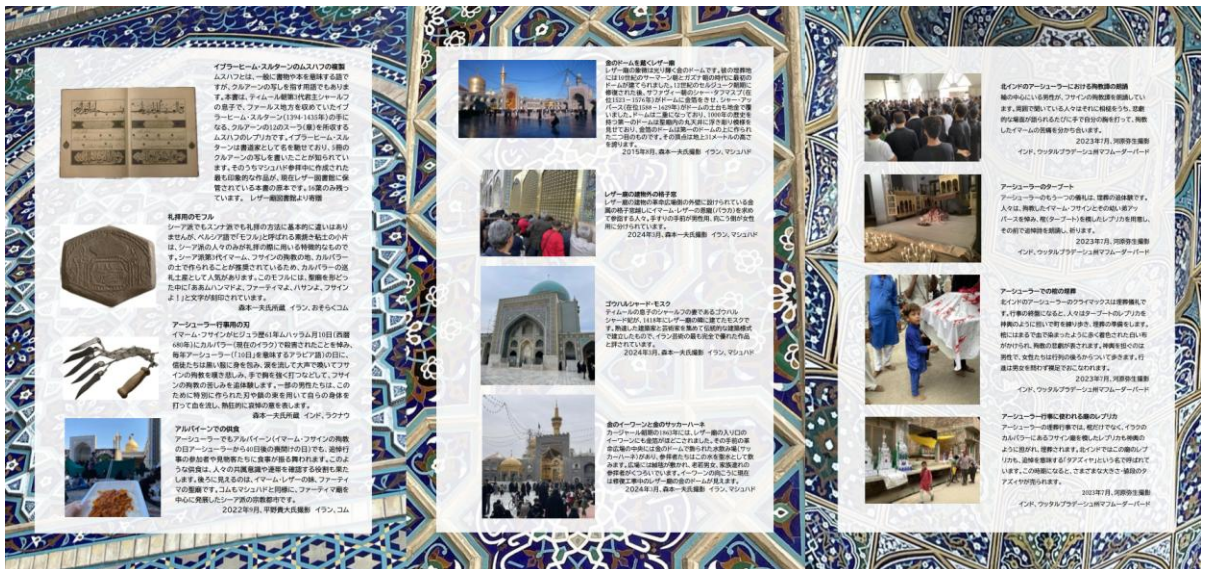
・ 会場の収容人数が少ないのが残念だった。

展示への来場者からのアンケート調査では（回答者は、高校生・学部生・卒業生・教員・職員・他大学の図書館員の計 12 名）、印象に残った展示物として、多くの人が、札拝用モフル、アーシューラー行事用の刃と鎖、カルバラーの聖廟のミニレプリカ、イブラーヒーム・スルターンのムスハフを挙げた。シーア派信仰に関するモノや大型の写本レプリカは強い印象を残したらしい。

展示全体の感想としては以下のような意見が得られた（一部抜粋、文言の修正あり）。

- ・ 展示を見て、イランやイスラーム教シーア派の歴史や文化によりポジティブなイメージと関心を持った。
- ・ 自分の知らなかったイランの風習や、建物を見られて、どのような点が日本と違うかが見えて楽しかった。
- ・ シーア派について、ニュースや新聞で目にはするものの、このような資料をじっくり見たのは初めてだった。
- ・ 世界情勢が不安定な昨今、同じアジア圏のひとつの文化としてこのような世界があることを、もっとよく知り向き合うべきだと思った。

今後のレザー廟との交流およびアジア研究図書館の活動の参考にさせていただきたい。



展示パンフレット (三つ折り) 表・裏

ラオスにおける生業変容と住民の栄養・健康： 人類生態学的視点からの考察

木部 未帆子

(東京大学大学院医学系研究科 助教)

はじめに

学内セミナーでのご縁をきっかけに、RASARL の河崎豊先生から本稿執筆の機会をいただいた。アジアに関する幅広いテーマを扱えるとのことだったため、筆者の専門である人類生態学、調査地であるラオス、具体的な研究内容について紹介した後、研究で活用している文献資料について述べたい。

人類生態学について

人類生態学 (human ecology) は、人間と環境の相互作用を研究する学問分野である。ここでいう「環境」には、自然環境だけでなく、社会、文化、コミュニティ、家庭なども含まれる。筆者が所属する東京大学の人類生態学教室では、以下のような研究領域を扱っている¹。

1. 人口動態 (低出生率、高齢化、地方-都市間移動、移民、人口の将来予測)
2. 食と栄養 (栄養不良、食習慣、食環境 [フードデザートなど]、腸内細菌による代謝)
3. 健康と疾病 (健康転換、感染症・非感染性疾患の疫学)
4. 人類学 (在来知、生存戦略、生業活動、健康追求行動、ジェンダー)
5. 環境保健 (有害物質 [農薬・重金属など] への曝露、大気・水汚染、環境正義)
6. 地理空間情報科学 (土地利用、人間の行動の解析、社会サービスの分布)
7. 気候変動 (台風・熱波・干ばつなどが食料生産・健康・社会に与える影響)
8. 都市と農村 (過密・過疎、都市スプロール化、高齢者ケア、出稼ぎ、生業活動の変容)

研究テーマは多岐にわたるが、生物学的側面と文化的側面を統合し、質的データと量的データの双方を重視する点は共通している。研究手法としては、フィールドワーク、実験室での生体試料 (尿や血液など) および環境試料 (土壌、水、食物など) の測定、動物実験、地理空間情報システム (GIS) による解析、統計解析やシミュレーション・モデルを用いた分析などを組み合わせて用いる。筆者の研究室は医学系研究科に属するため、「理系」の要素が強い印象を持たれがちだが、実際にはこのような「理系」「文系」の枠を超えた超学際的な (transdisciplinary) アプローチを特徴としている。

¹ 渡辺知保ら (2011). 『人間の生態学』朝倉書店、東京。

ラオス

筆者はラオス北部、中国との国境近くに位置する農山村を調査地とし、生業の変容と住民の栄養・健康の相互作用を研究している。本節では、人類生態学の視点からラオスの特徴について述べる。

ラオスは東南アジア大陸部に位置する内陸国である。国土面積は日本の本州とほぼ同じで、その約 80%が森林に覆われている²。2023 年時点の人口は約 766 万人と推定されており³、政府の公式統計には 50 の民族集団が記録されている⁴。

ラオスを含む東南アジア大陸部では、低地と山地という異なる生態環境に基づく社会が併存している。メコン川流域などの低地には、タイ系民族が多く住んでおり、水田稲作を中心とした生業を営んできた。一方、北部・東部・南部に広がる山地には、モン (Mon)・クメール系、モン (Hmong)・ミエン系、チベット・ビルマ系など多様な民族が暮らしており、焼畑農耕や狩猟採集が広く行われてきた⁵。また、山地では二次林で採取される非木材林産物 (タイガーグラスや苦い竹の子、カルダモンなど) が重要な交易品となっている⁶。

低地の水田稲作は、山地の焼畑稲作よりも収量性と安定性に優れ、より多くの人口を扶養できたと考えられている⁷。実際に、ラオスの主要都市 (ヴィエンチャン、ルアンパバーン、パクセーなど) は低地に位置しており、政治や経済の中心となっている。一方で、山地の焼畑農耕はしばしば貧困や森林破壊の原因とみなされ、開発の対象とされてきた。低地社会と山地社会の関係は「中心＝周縁」「支配＝従属」と捉えられる傾向にあったが、実際には交易や移住などを通じてより多様で動的な関係が築かれてきた可能性が指摘されている⁷。

ラオスにおける人間と環境の相互作用は、市場経済の進展と農村開発政策の影響を受け、大きく変容している。1986 年、ラオス政府は「新思考 (チンタナカーン・マイ)」と呼ばれる経済開放政策を打ち出し、市場経済の導入を進めた⁸。特に山地では、焼畑農業とアヘン栽培の廃止、換金作物栽培の奨励、社会サービスへのアクセス改善などを目的とした、低地への移動・再定住が促進されてきた⁹。1996 年の森林法では、保護林の拡大に伴い、二次林や焼畑へのアクセスが制限された。その結果、山地民にとって従来の生業戦略 (焼畑

² Lao Statistical Information Service (LAOSIS). Forest area by National forest classification.

https://laosis.lsb.gov.la/statHtml/statHtml.do?orgId=856&tblId=DT_YEARBOOK_AO001&vw_cd=MT_ATITL_E&list_id=&scrId=&seqNo=&language=en&obj_var_id=&conn_path=I2&path= (最終アップデート日: 2025 年 2 月 4 日、最終閲覧日: 2025 年 3 月 25 日)。

³ データ元: United Nations World Population Prospects

<https://data.worldbank.org/indicator/SP.POP.TOTL?locations=LA>

⁴ ສະພາແຫ່ງຊາດ ແຫ່ງ ສປປ ລາວ (ラオス人民民主共和国国会). (2024 年 9 月 17 日). ປັບປຸງຈຳນວນຊົນ 49 ຊົນເຜົ່າ ຈຳນວນ 50 ຊົນເຜົ່າ (「49 民族」としている本の内容を改訂し「50 民族」として出版).

<https://na.gov.la/%e0%ba%9b%e0%ba%b1%e0%ba%9a%e0%ba%9b%e0%ba%b8%e0%ba%87%e0%bb%80%e0%ba%99%e0%ba%b7%e0%bb%89%e0%ba%ad%e0%bb%83%e0%ba%99%e0%ba%9b%e0%ba%b6%e0%bb%89%e0%ba%a1-49-%e0%ba%8a%e0%ba%bb%e0%ba%99%e0%bb%80/> (最終閲覧日: 2025 年 3 月 25 日)。

⁵ 焼畑農耕を行うタイ系民族もいれば、水田を所有している山地民も少なくない。

⁶ Yokoyama (2010). *Japanese Journal of Southeast Asian Studies*, 47(4), 374-402.

⁷ スコット, J. C. 著, 佐藤仁監訳 (2013). 『ゾミア—脱国家の世界史』みすず書房, 東京. ISBN: 9784622077831

⁸ Songvilay et al. (2017). *Asian Perspective*, 41(2), 239-262.

⁹ Baird & Shoemaker (2007). *Development and change*, 38(5), 865-888.

農耕、野生動植物の狩猟採集、非木材林産物の採取) を維持することが困難になった¹⁰。一方で、農薬を使用した換金作物栽培は急速に拡大している。筆者の調査地であるラオス北部では、ゴム、トウモロコシ、サトウキビなどの栽培が近年著しく増加している¹¹。

このような急激な変化に対し、住民がどのように適応しているのか、あるいは適応できずにいるのか、それが彼らの社会、健康、生存にどのような影響を及ぼしているのかについては、依然として十分な研究がなされていない。特に、定量的データの蓄積が求められる。

研究紹介

以下では、筆者がこれまでに実施した研究を二つ紹介する。いずれの研究も、ラオス北部における生業変化と、それが住民の栄養や健康に与える影響について調べたものである。

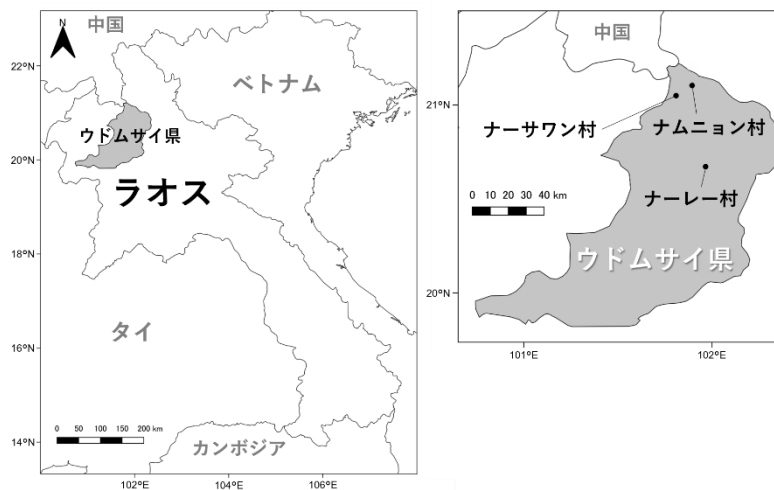


図 1. ラオス調査地地図

(1) 生業戦略の変化と栄養摂取および身体活動パターン

Kibe, M., Tomita, S., & Umezaki, M. (2022). Divergence in nutritional intake and physical activity patterns among households in a village of ethnic minorities in northern Laos at the initial stage of health transition. *Human Ecology*, 50(2), 287-305.

<https://doi.org/10.1007/s10745-022-00310-y>

¹⁰ Prime Minister's Office & Ministry of Agriculture and Forestry. (2005). *Forestry Strategy to the Year 2020 of the Lao PDR*. Retrieved on June 21, 2021, from the FAOLEX Database

<https://www.fao.org/faolex/results/details/en/c/LEX-FAOC144178/#:~:text=The%20Vision%20of%20the%20present,advancing%20national%20socio%20economic%20development>

¹¹ Vongvisouk et al. (2014). *Applied Geography*, 46, 1-10.

筆者は、現在ラオスの山地に暮らす集団がどのように食料を入手し、何をどのくらい食べ、どのような活動をして生活しているかを定量的に記録した。また、生業戦略の違いが栄養摂取や身体活動パターンにどのような影響を与えるかを検討した。

【調査地】

ウドムサイ県ナムニョン村

【参加者】

14 夫婦 (n=28)

【方法】

1. 基本情報の収集 (2019 年 1 月、8 月)

各世帯を訪問し、インタビュー調査を実施した。世帯員の名前、性別、年齢、民族などを聞き取り、生業活動に関して焼畑や水田の耕作面積、農作物・非木材林産物・家畜の販売による現金収入を調査した。

2. 食事調査 (2019 年 8-9 月のうち 3 日間/夫婦)

参加者が 1 日に食べたすべての食物をクッキングスケールで計測した (直接秤量法)。食品ごとの重さ、食品の現地語名、部位、調理方法、入手方法などを記録し、食品成分表を用いて栄養素摂取量を計算した。

3. 身体活動調査 (2019 年 8-9 月のうち 3 日間/夫婦)

参加者の行動 (除草・採集・調理・歩行など) を 2 分ごとに記録した。加速度計を用いて身体活動の強度を計測し、エネルギー消費量を算出した¹²。

【解析】

インタビュー調査で得た生業活動に関するデータをもとに、階層型クラスター分析¹³を行い、世帯の生業戦略を分類した。生業戦略の異なる世帯グループ間で栄養摂取と身体活動パターンを比較した。

【結果】

参加者は 1 日に約 1kg のコメを摂取しており、エネルギーの約 9 割とタンパク質の約 6 割がコメから得られていた。動物性食品の摂取量は少なく、カルシウムやビタミン B1、ビタミン A の欠乏が疑われた。1 日の労働時間は、男性約 6.8 時間、女性約 6.1 時間で、エネルギー消費量は摂取量とほぼ釣り合っていた。

世帯の生業戦略は、「焼畑型」(焼畑の耕作面積と非木材林産物の販売による収入が多い) と「水田型」(水田の耕作面積と家畜¹⁴の販売による収入が多い) に分類され、これら

¹² Kumahara et al. (2004). *British Journal of Nutrition*, 91(2), 235-243.

¹³ 多変量解析の一種で、与えられたデータ群の中から似たもの同士を集めて群 (クラスター) に分類する方法である。ここでは、似た生業戦略をとっている世帯をグルーピングする。

¹⁴ ブタやニワトリ、アヒルなどの家畜は、水田の小屋や家の周辺で飼育されることが多い。

のグループで栄養摂取と身体活動パターンに違いが見られた。焼畑型世帯は、タケノコや野生植物、イノシシ肉を多く食べ、食物繊維とビタミン C を多く摂取し、歩行に多くの時間を費やしていた。一方、水田型世帯は、小魚やタウナギなどの水生生物、食塩を多く摂取し、ナイアシンとビタミン B12 の摂取量が多かった。



図 2. ナムヨン村における食事の様子 (雨季後期)

(a) もち米と野菜のおかずが中心の食事である。

(b) 焼畑や水田での農作業は共同で行われ、小屋で昼食を共にする。

(Fig. 3, Kibe et al., 2022)

【考察・結論】

焼畑型世帯と水田型世帯の栄養摂取および身体活動パターンの違いは、それぞれの活動領域に起因すると考えられる。焼畑やその周辺の二次林では野生動植物の狩猟採集が行われ、また、焼畑は水田よりも家からの距離があり、歩く時間が長くなる傾向がある。これに対し、水田やその周辺の灌漑水路・小川では、小魚や水生生物が捕獲される。

ラオスの山地では、生業活動（焼畑・二次林の利用）が開発の対象とされ、低地型（水田・常畑の利用）への移行が推奨されているが、この研究で観察された生業戦略の違いは、住民の栄養や健康に影響を与える可能性を示唆している。具体的には、山地型から低地型

への移行が、野生植物や食物繊維の摂取量の減少をもたらし、食塩の摂取量を増加させる可能性がある。野生植物の摂取量の減少は、抗炎症効作用を持つ植物化学物質の摂取減少を招く恐れがあり¹⁵、食物繊維摂取量の減少は肥満や心血管疾患のリスクを高め¹⁶、食塩の過剰摂取は高血圧のリスクを増加させると考えられている。このように、生業活動の変化が住民の栄養と健康に与える影響を考慮することは、自然保護や農村開発プロジェクトにおいて重要な視点となる。

(2) 市場経済化と慢性ストレスとの関連

Kibe, M., Mizuno, Y., Masuoka, H., Kosaka, S., Natsuhara, K., Hirayama, K., ... & Umezaki, M. (2024). Transition to a market economy and chronic psychosocial stress in northern Laos: An exploratory study of urinary free cortisol in rural residents. *American Journal of Human Biology*, 36(1), e23976. <https://doi.org/10.1002/ajhb.23976>

筆者は、研究(1)の研究のようにフィールドワークを主な手法としてきたが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、渡航できない時期が 2 年ほど続いた。そこで、日本でできる研究を考え、コロナ流行前にナムニョン村および他の 2 村 (図 1) で採取した尿サンプルを用いて、「コルチゾール」というホルモンの測定を行った。

コルチゾールは、脂肪・タンパク質・炭水化物の代謝、血圧と血糖の調節、炎症の抑制など、多くの生理的過程に関与するホルモンであり¹⁷、特に心理社会的ストレスに応じて分泌量が増加することが知られている¹⁸。過剰なコルチゾール分泌は、心血管疾患やがんといったストレス関連疾患のリスクを高めることがあるとされている¹⁹。ラオス北部で進行中の市場経済化や生業の変容が、新たな心理社会的なストレスを住民にもたらしめている可能性があるため^{20, 21}、筆者はこれを調査した。

【調査地】

ウドムサイ県の 3 村

- ・ ナムニョン村 (市場経済化レベル：低)：山地、焼畑＋水田、換金作物栽培
- ・ ナーサワン村 (市場経済化レベル：中)：盆地、水田、換金作物栽培
- ・ ナーレー村 (市場経済化レベル：高)：空港や大市場の近く、食料を現金で購入する

【参加者】

20～60 歳の男女 (n=168)

(ナムニョン村 n=58、 ナーサワン村 n=61、 ナーレー村 n=49)

¹⁵ Khan et al. (2016). *Journal of Food Biochemistry*, 40(1), 61–70.

¹⁶ Anderson et al. (2009). *Nutrition Reviews*, 67(4), 188–205.

¹⁷ Levine et al. (2007). *Physiology & Behavior*, 90(1), 43–53.

¹⁸ Dickerson & Kemeny (2004). *Psychological Bulletin*, 130(3), 355.

¹⁹ Cohen et al. (2007). *JAMA*, 298(14), 1685–1687.

²⁰ von Rueden et al. (2014). *Evolution, Medicine, and Public Health*, 2014(1), 122–133.

²¹ Konečná & Urlacher (2017). *Evolution and Human Behavior*, 38(6), 789–797.

【方法】

1. インタビュー調査 (2018 年 8 月、2019 年 3 月)

参加者の基本情報と生業活動について聞き取った。

2. 尿サンプルの採取 (2018 年 8 月、2019 年 3 月)

コルチゾールは概日リズム (夜間に最低値、朝の起床時に最高値) を持つため、午前 8 時から正午までにサンプリングされた尿を解析対象とした。

3. コルチゾール濃度測定と村落間比較

間接競合酵素結合免疫吸着測定法 (ELISA) を用いて尿中コルチゾール濃度を測定し、年齢、ボディマス指数、調査会場に到着した時刻で補正を行った。性ホルモンの影響を考慮し、男女別に村落間で比較を行った。

【結果】

市場経済化が最も進んでいるナーレー村の男性の尿中コルチゾール濃度は、他 2 村の男性よりも有意に高かった。女性では村落間で差は見られなかった。

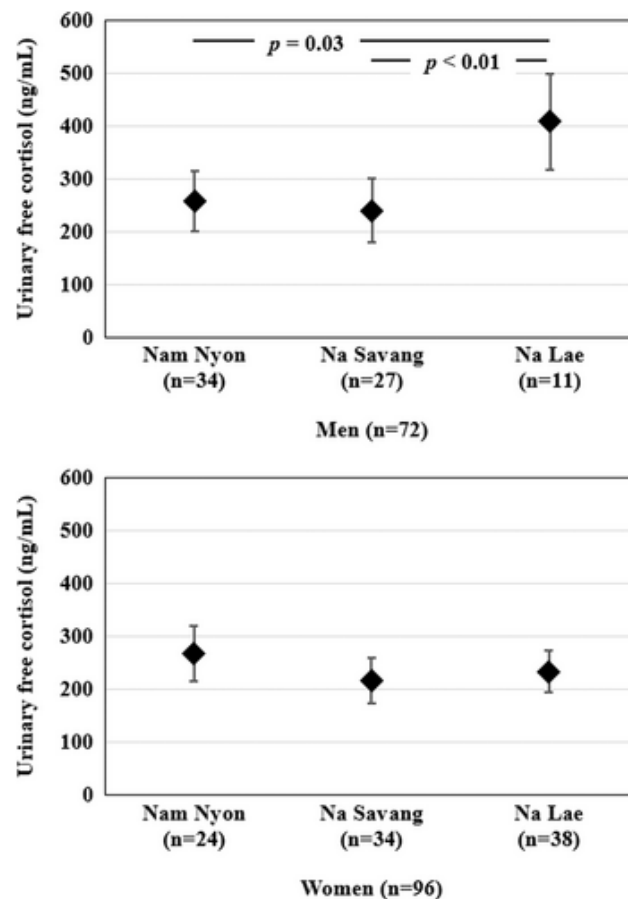


図 3. 尿中コルチゾール濃度の村落間比較 (男女別)
(FIGURE 1, Kibe et al., 2024)

【考察・結論】

ナムニョン村・ナーサワン村では、全参加者が家族経営のコメ栽培を行っている一方、ナーレー村では約半数がコメ栽培をやめて他の仕事に就いている。女性は家族経営の事業（小売店や小さなレストランなど）に従事することが多いが、男性は肉体労働（道路工事、建設作業、自動車運転など）に従事する傾向があり、賃金労働や労働市場に関わる男性が増えている。このような生業の変化が、男性の生業活動における裁量権の低下に対する不安を引き起こし、心理社会的ストレスを増加させ、それが尿中コルチゾール値の上昇に繋がった可能性がある。この結果は、市場経済化が特に男性におけるストレス関連疾患のリスクを増加させる可能性を示唆している。

筆者が主な調査地としてきたナムニョン村では、コロナ禍の間にサトウキビの契約栽培が開始され、生業戦略や現金収入、食事や身体活動パターン、さらには農薬などの化学物質への曝露などが大きく変化した。筆者は 2022 年の夏からフィールドワークを再開してこれらの変化に関するデータを収集しており、今後さらに解析を進めていく予定である。

ラオス人類生態学研究のための文献資料

以下は、ラオスでの人類生態学研究に役立つ文献資料の紹介である。

1. Harmand, F. J. (1878-79). *Le Laos et les populations Sauvages de L'Indochine in Le Tour de Monde*. ("Laos and the Hilltribes of Indochina"; translation in English and introduction by Tips, W. E. J. [1997]) White Lotus, Bangkok. ISBN: 9748496996
(東大・文学部図書館に所蔵あり)

ラオスに関する文献資料の数は限られており、特に民族誌や山地社会に関する記述は貴重である。19 世紀のフランス人探検家 Harmand による記録は、植民地時代前のラオスの様子を知るための重要な資料である。

2. Chazée, L. (1999). *The Peoples of Laos: Rural and Ethnic Diversities*. White Lotus, Bangkok. ISBN: 9748434869
(東大には所蔵なし、国立国会図書館関西館に所蔵あり)

ラオスに住む 132 の民族グループ・サブグループに関する文化や社会、生産活動などについて、初めて体系的にまとめられた文献である。各民族の地理的分布を示す地図や写真も豊富で、ナムニョン村の少数民族 (Kongsat および Phunyt) についても記載がある。

3. スコット, J. C. 著, 佐藤仁監訳 (2013). 『ゾミア—脱国家の世界史』みすず書房, 東京. ISBN: 9784622077831
(東大・総合図書館、駒場図書館などに所蔵あり)

ゾミアとは、ラオス北部を含む東南アジア大陸山地部とその住民を指す言葉である。この書籍は、低地社会と山地社会の共存や国家との関係について理解する上で必読である。

4. Human Relations Area Files (HRAF)

(東大には所蔵なし、京都大学・早稲田大学・国立民族学博物館などで閲覧可能)

HRAF は、世界各地の民族や地域の文化・社会について書かれた文献を、地域・民族別、主題別 (食文化、衣服など) に分類したファイル資料である。オンラインの eHRAF データベースも運営されており、地域や主題を横断した分析に役立つ。

5. 山田紀彦編 (2017). 『ラオス人民革命党第 10 回大会と「ビジョン 2030」』アジア経済研究所, 千葉. ISBN: 9784258300280

(東大・経済学図書館に所蔵あり)

ラオス政府の政策、特に農村開発や土地利用に関する政策は、山地住民の土地利用や生業活動に大きな影響を与える。この資料は、政府が掲げるビジョンと政策の背景を理解するために重要な文献である。

おわりに

本稿では、筆者の研究紹介を通じて、ラオス北部における生業の変容とその住民の栄養・健康への影響について論じてきた。市場経済の進展に伴う従来の生業戦略の変化が、住民の心身の健康に望ましくない影響を与えている可能性が示唆された。ラオス農山村における持続可能な開発と住民の健康・福祉の向上を目指し、さらなるデータ分析と文献資料の活用によって知見を一層深めていく所存である。

アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide>

場 所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日) 定例休館日(おおむね毎月第4木曜日) 夏季の一斉休業日(2日間) 試験等大学行事のための閉館日 その他臨時閉館日

開館時間

	曜日等	通常期	8月・3月
	月～金曜日	9:00～22:30	9:00～21:00
	土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai>

次号の予定

第20号は令和7年7月7日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館([asialib\[at\]lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib[at]lib.u-tokyo.ac.jp))までお知らせ下さい。

編集後記

第19号をお届けします。

研究者に積読はつきものかと存じます。私も同様で、拙宅の自室はもはや収集のつかない状態になっています。つい最近、10年ほど前に買いっぱなしのまま放置していた或る研究書を読む必要に迫られ、発掘して開いたところ、冒頭の数十ページに私の書き込みを発見し…もはや私の記憶力も収集がつかないほど混乱しているようです。(J)